

秋田大学

国際交流センターニュース 第10号

Akita University International Exchange Center News

- ・留学生200名突破 …… (1)
- ・海外拠点開所 …… (1)
- ・協定・イベント …… (2)
- ・留学生情報 …… (3)
- ・海外出張・進学説明会 …… (4)

留学生200名突破とこれから ～秋田大学の国際化とは～



秋田大学に在籍する外国人留学生は211名となり、「吉村プラン」として中期目標に掲げている「留学生200名」を半年前倒し2012年10月1日現在で達成することができました。坐して待っていても留学生が増えるわけではなく、この数値は国際交流センター教職員が国内外の留学説明会に積極的に出かけるなど、海外に向けて働きかけた結果です。また海外協定大学の増加もこれに寄与していると思います。しかし、本学の大学院生を含む全学生数は5,200名程ですから、留学生は4%にしか過ぎません。個人的には5%超を目指したいと考えていますが、一方でみえてきた課題も多くあります。まず講義内容を留学生のキャリア形成にとって魅力ある内容にすること、専門科目の英語授業を増やすこと、正規学生を増やすこと、大学院ではダブルディグリー制の導入等が挙げられます。また留学生が快適に暮らせる寮の不足などハード面でのキャンパ

ス環境整備もまだ十分とはいえません。本学の国際化は緒についたばかり、と認識しています。

(榎本克彦: ENOMOTO Katsuhiko 国際交流センター長)

この10月、秋田大学では211名の留学生を迎えることができました。私の着任した2008年には124名(5月1日時点)でしたので、1.7倍に増えたこととなります。国際交流センターが、留学生受け入れ・派遣推進に関し、全学センターとしてさまざまな制度開始や改革を進め、行事の実施、施設の整備に努めてきた結果だという自負はあります。この4年の間に職員は全員入れ替わり、教員は1名から3名に増えました。まず国際交流センター元・現職員と同僚の西田准教授、市嶋助教に感謝したいと思います。一方で、学内他部局の教職員の方々の協力なくては、200名超の留学生を受け入れることは決してできませんでした。お一人おひとりの名前は挙げられませんが、国内外の留学・進学フェアへの参加、協定校との連絡調整、研究者・職員交流にご協力いただいた教職員のみなさん、ここに改めて感謝申し上げます。

このような全学的な協力を今後に生かすためには、本学の教育研究の質の向上にますます貢献できる形で、国際化を進めていく必要があると考えています。制度は個々の関係者の熱意と思想に支えられていることを忘れずに、一人ひとりの教職員にとって意義のある国際交流をめざしていきます。

(牲川波都季: SEGAWA Hazuki 国際交流センター)

モンゴル科学技術大学に 初の海外事務所開設と今後の活動

10月8日、モンゴル科学技術大学(以下MUST)に秋田大学初の海外事務所が開設しました。開所式では、榎本克彦秋田大学副学長(国際戦略担当・国際交流センター長)、今井亮国際交流センター副センター長、高橋嘉行国際交流推進役らが参加し、テープカットおよび同室に掲げられた看板の除幕式を行いました。日本語で大書された秋田杉の看板のほか、同室扉にはモンゴル語と英語のプレートも取り付けられました。除幕式に先立って行われた署名式において、バヤンドウレンMUST学長他の同大首脳部教授らに対して秋田大学および国際資源学教育研究センター(ICREMER)の概要を水田が説明しました。

モンゴル共和国はアジア大陸中央部に位置し、金、銅、希土類元素など多くの金属資源に恵まれ、資源の安定的かつ持続的な確保を考える上で、わが国にとって極めて重要な国のひとつです。MUSTとの交流は、水田らが約10年前から実施している銅-亜鉛鉱床の資源調査が最初ですが、最近では、地球資源学専攻の今井教授(ICREMER協力教員)やICREMERの緒方助教が頻りに同国を訪問し、秋田大およびMUSTの両大学院生の地質調査、資源探査共同研究等の実施を支援しています。

MUSTに秋田大学事務所が開設されたことで、秋田大学教員などのモンゴルにおける確固たる足場が築かれたことにな

ります。秋田大学東京オフィスと同様に、室内に秋田大学の資料や入試関連書類を備え、常時、日本への留学や研修を希望するモンゴルの学生、大学院生への秋田大学に関する広報活動を行うことは勿



海外事務所設立のテープカット

論のことです。さらに、本事務所を拠点として学術交流で訪れる秋田大の教員や資源学インターンシップ等で研修する学生が本室に滞在することも予定されています。モンゴルにおける共同研究の遂行にはさらなる環境の充実も必要となります。MUSTのみならずその他の大学との交流発展、特に資源学教育および研究体制整備への協力等を目指しています。

同事務所を拠点に、広大なゴビに眠れる資源大国モンゴルでの地質調査・資源探査が飛躍的に進み、両大学間の協力が一層、強化されることが期待されております。

(水田敏夫: MIZUTA Toshio 国際資源学教育研究センター長)



バヤンドウレンMUST学長(左)、榎本秋田大学副学長(右)

王立ブータン大学との協定締結

ヒマラヤの秘境ブータン王国の首都ティンブーにある王立ブータン大学は、ワンチェク国王が学長を務め、カレッジ10校からなる大学です。秋田大学は今年7月、日本の大学として初めて包括協定を結びました。この協定により実際に何をやるのか、というのが多くの方の疑問だと思います。私は協定調印の際、看護師や助産婦を養成するRoyal Institute of Health Scienceを訪問しました。学生たちが不十分な設備にもかかわらず一生懸命勉強している姿をみると私達がやるべきことは自明と思えました。帰国して早速医学部保健学科の先生たちに支援をお願いし、嬉しいことにいまそれが形になりつつあります。一国の教育や健康政策をお手伝いできることは秋田大学にとっての「幸せ」であると思います。



(榎本克彦: ENOMOTO Katsuhiko 国際交流センター長)

「ブータンに学ぶ『幸福学』」開催される

王立ブータン大学の教員3名を招いたシンポジウムが11月8日に開かれ、本学学生・教職員や市民約100名が参加しました。言語文化学院のルンテン・ギャツォ学院長は「幸福—人生の目的」と題して講演。幸せの指標として経済的要素は否定しないが「家族や社会との関わり、自然環境や文化とのバランスが重要であること」を強調されました。ネザン・ワンモ健康科学院産学連携学部長は「ブータン王国入門」と題し地理・歴史的な背景や風習を、ドルジ・ティンレー研究・渉外担当理事はGNH（国民総幸福）の理念に基づく教育現場の具体的な取組みを紹介。翌日からは医学部附属病院やシミュレーションセンター、保健学専攻実習室の見学、秋田市長表敬訪問など、精力的に活動されました。また、秋田大学インフォメーションセンターでは、豊かな表情の人々やブータン独特の風景を納めた写真や「ゴ」「キラ」と呼ばれる民族衣装、チベット仏教で用いられる仏具等を展示した「ブータン展」が約一週間開かれました。

両大学の交流は、スタートを切り着実に走り始めました。来年早々には保健学科教授2名の王立ブータン大学視察・講義の開催を予定しており、今後全学を通じた取組みも期待されます。



ルンテン・ギャツォ
言語文化学院長

(国際課)

フライベルク工科大学との調印

ドイツフライベルク工科大学のトーマス・ピア教授が7月4日来学し、吉村学長と大学間交流に関する協定書に署名、交換を行いました。フライベルク工科大学と秋田大学工学資源学研究科は、2006年に部局間協定を結び共同研究等を進めています。今回の全学協定締結により、平成26年度に新設が予定されている国際資源学部（仮称）に向け、より多面的で活発な交流活動の基盤が整いました。

フライベルク工科大学は、1765年にフライベルク鉱山アカデミーとして設立された世界最古の鉱山技術者の養成機関です。国立秋田鉱山専門学校の初代校長を務めた小花

冬吉がモデルとした大学としてゆかりがあります。また、フライベルク鉱山アカデミー出身のカート・ネットーは、小坂鉱山の近代化に貢献し、「日本の鉱山の父」と呼ばれています。

今回の学術交流計画では学生交換が柱の一つとなっており、資源をはじめ工学分野の学生がこれら先人の大志に啓発され、フライベルク工科大学に留学する夢を育んでもらいたいと期待しています。

(国際課)



国立ハンバット大学校日本語学科長 趙南星先生のご訪問

協定校である韓国国立ハンバット大学校日本語学科長の趙南星先生が、9月24日から27日まで秋田にいらっしゃいました。ハンバット大学校では、学科長の本学訪問が公式の業務として学校から認められ、今後も定期的な訪問が予定されているとのこと。25日には、国際交流センターの配慮で、榎本センター長・牲川准教授・高橋課長との昼食会も持つことができました。ありがとうございます。

今回は、10月に入学した5名のハンバット大学校学生（特別聴講生および日本語・日本文化研修留学生）の引率でした。留学生には入国初日から、寄宿舎入居と生活用品の購入などなど、地味ではあってもある意味でもっとも重要な仕事がありますが、趙先生もそれにご同行してくださいました。今後も、地道な交流が続くよう、窓口教員としても努力する必要があると考えています。

(高村竜平: TAKAMURA Ryohei 教育文化学部日本・アジア文化講座)

キズナプロジェクト

平成23年3月に発生した東日本大震災からの復興を国際社会の若者の参画を通じて支援することを目的とした外務省キズナプロジェクト。参加したマーシャル諸島及びミクロネシア共和国それぞれ22名の若者が9月22日に秋田大学を訪問しました。

秋田大学では、工学資源学部電気電子工学科の鈴木・水戸部研究室のロボット操作実演を通じて日本の先端技術の一端に触れる一方、50年以上の歴史を持つ鉱業博物館では、80歳を超えるボランティアの方々から熱心な説明を受け、地殻の構造や先端産業の血液ともいえるレアメタル等について理解を深めました。

その後、正面ゲート脇で行われた秋田大学竿灯会メンバーによる見事な技に誘われ、おぼつかない姿で竿灯を持ち上げる若者の姿が、夕方の秋田放送テレビで全県に放映されました。また、昼食を挟んだ秋田大学学生との語らいでは、自分達の趣味や関心事項について熱心に意見を交換していました。

秋田大学国際交流センターは、秋田大学の国際化を推進するために、今後も、学外の国際協力、交流事業に積極的に取り組んでいきたいと考えています。



(高橋嘉行: TAKAHASHI Yoshiyuki 国際交流推進役)

秋季新留学生オリエンテーション

10月から新たに秋田大学の仲間に加わった留学生に対するオリエンテーションを開催しました。まずは日本語のプレテスト。留学生は真剣な面持ちで試験に取り組んでいました。その後、留学生ガイダンスに参加しました。国際交流センター長及び教職員の紹介に引き続き、参加留学生全員が自己紹介をしましたが、流暢な日本語に驚かされました。その後英語グループと日本語グループに分かれて、生活上の諸注意と在留手続についての説明を受けました。最後にキャンパスツアーが実施され、キャンパス生活をする上で、必要な施設や窓口の説明を受けました。オリエンテーション終了後には、留学生会館などの近隣住民を招いての懇談会が行われ、リラックスした雰囲気の中で会話も弾み、参加留学生は入学後の緊張もほぐれた様子でした。ご参加いただきました、留学生会館がある三吉南町内会、国際交流会館がある田中町内会の皆様には、日頃のご理解とご協力に関してこの場をお借りして感謝申し上げます。

(西田文信：NISHIDA Fuminobu 国際交流センター)

新留学生のことば

~ FOR BETTER FOR WORSE...I LOVE AKITA ~

There have been lots of times I made several wishes but the one I shall always be thankful for coming true is my dream to visit Japan.

Before I got the chance to come to Akita, Japan, I had several impressions of Japan. A very developed place with beautiful lawns and scenic places but overcrowded. The most exciting thing about my trip however is the fact that I would have my first experience of winter in Japan.

True experiences truly begin when we break out of routines. I started living my dream when I boarded my maiden flight. The flight to Japan. I had always felt good travelling around but not like my trip to Japan. The experience was invaluable.

The feeling when I arrived in Japan was priceless. The order, the development and the people reminded me that I was miles away from my country. I could sense already that my life in Akita would be fun.

We arrived in Akita from Tokyo early in the morning. We were met by our very kind tutors. The moment I stepped out of the bus, I was full of pride and happy. Everything seemed new to me. For a moment I felt like I was starting to live life all over again.

Akita university community is an amazing one. The kind people, beautiful girls and clean environment make my life fun. With every day that passes, I feel honored to be ↗

↘ at such a nice place. Nevertheless, as I start my new life here, I still hold one dream, I want to experience winter! By the end of my stay, I hope I would have learnt to speak Japanese fluently and probably enhance the relations between my University and Akita University. Kenya and Japan.

(Tonnie Newton：教育文化学部交換留学生)

AUEP (Akita University Experiential Program) 修了式・祝賀会開催 (8月1日)

修了式では、センター長から修了生一人ひとりに記念品等が手渡され、修了生(計17名)は、留学当初から比べてずいぶん流暢になった日本語で挨拶を行いました。祝賀会には、留学生や日本人学生に加え、近隣町内会の方々にも出席いただき、秋田での留学生生活を無事に終えて、母国に帰国する留学生を送りました。



(吹谷美穂：FUKIYA Miho 国際課留学生交流・支援担当)

夏休みビクトリア短期語学研修

9月3日から9月30日の1か月間、柴田朱里・佐藤華奈・磯谷匠(教育文化学部1年)、佐藤晶子(工学資源学部1年)、酒井亮(工学資源学部4年)の5名がビクトリア大学(カナダ)での英語研修に参加しました。

プログラムは、月曜から木曜までは午前3時間、午後2時間の講義を受け、金曜はハイキングやホエールウォッチングなどのアクティビティに参加するものでした。講義の内容は、ペアやグループでのディスカッションが主体で、与えられたテーマについてクラスメイトと意見交換をすることで文法や語彙を身につけました。他国の留学生や異なる年代の方とコミュニケーションをとることで、文化や価値観を共有することができました。

ビクトリアは、朝晩は冷え込みますが日中は過ごしやすく、山や湖などもたくさんあり、自然に溢れたすばらしい街でした。また、ホストファミリーやスタッフが非常に親切で、1か月間不自由なく過ごすことができました。

研修に携わる全ての方たちのおかげで、このような環境の中私たち5人は、英語やカナダの文化を学びながら、とても素晴らしい経験をすることができました。



研修に参加した5名(筆者右端)

(酒井亮：SAKAI Ryo 工学資源学部 材料工学科4年)

担当教員からひとこと

本センターで留学生相談を担当して2年が過ぎた。多様性に富む異質な価値観を持つ留学生と相談を行うに当たって、文化的背景や歴史的背景は勿論のこと、青年期の発達課題についても配慮してきている。しかし最も大きな問題は言語的課題であることに気づかされる。媒介言語として私は英語ないしは中国語を用いているが、中には努めて出来るだけ日本語で問題点を伝えようとする学生もいる。感情的表現や抽象的表現が十分に出来ないために、自尊心が傷ついたり自己評価が低くなり強いストレス状態に置かれたりすることは、私自身の留学体験や、フィールドで未知の言語を調査してきている経験からも理解できる。カウンセラーたる私と問題を共有することは困難な点が少なくないが、それでも、留学生の問題点が、学生自身の内省や私との対話によって少しずつ明らかになり、解決策を見出していくプロセスは、スリリングで創造的な協働の営みであり、今後も研鑽を積んでいく所存である。

(西田文信：NISHIDA Fuminobu 国際交流センター)

中国出張報告

中国の協定大学との交換留学を促進する目的で平成24年8月、遼寧省瀋陽市の東北大学、吉林省長春市にある吉林大学、上海市の東華大学を訪問しました。訪問の直前、香港の活動家数名が尖閣諸島に上陸する事件が発生し緊張しましたが、それぞれの大学では外交面のぎくしゃくした関係とは無縁の丁寧な扱いを受けました。

訪問した三大学とも中国の国家重点大学に指定される総合大学で図書館や留学生用宿舎などのインフラ面では、秋田大学より遥かに優れているとの印象を持ちました。

尖閣諸島問題を含めて日中両国の間には、多くの課題が横たわっていますが、これらの解決には、若い世代が互いの状況を正しく認識することが第一歩となります。この点で、大学の果たす役割は、非常に重要です。

現状、中国の協定大学との交換留学は、先方から秋田大学へという一方的な流れになっていますが、今後は、秋田大学学生にも、中国の大学への留学を働き掛けていきたいと考えています。



(高橋嘉行：TAKAHASHI Yoshiyuki 国際交流推進役)

～日本 東京・大阪 (7月14日・15日)～

JASSO (日本学生支援機構) 主催の進学説明会が行われ、大阪会場には工学資源学研究科後藤教授、国際交流センター牲川准教授及び田能村、東京会場には教育文化学部池本准教授、工学資源学研究科村岡教授、工藤入試課員が参加しました。例年よりもブース来場者が増え、専攻に対する具体的な質問内容も多く、学生の意欲を直に感じた二日間でした。来場者の多くを占める日本語学校の学生には「北国への移住」というハードルもありますが、秋田大学ならではの環境で豊かな経験を積んでほしいという気持ちを伝えようと、説明に熱が入りました。



進学説明会 (大阪会場) の様子

(田能村百代：TANOMURA Momoyo 国際課)

～モンゴル ウランバートル (10月5日～7日)～

モンゴルで行われた日本留学フェアに参加してきました。日本から12大学が参加し、1,070人の参加者が集まりました。1日目は高校訪問、2日目が大学紹介のプレゼンテーション、3日目が個別ブース対応をし、本学には90名の訪問がありました。土木や建築、経済を志望する学生が多く訪問しましたが、モンゴルの道路などのインフラ事情を考慮すると志望理由も納得です。個人的に初めて参加したフェアでしたが、秋田大学として今後どの分野の人材を海外から



迎え入れ、大学として卒業・修了させたいのかを再検討し、フェアに望むことの必要性を感じました。モンゴルは、親日派の人が多く、経済発展途中の勢いを実感した出張でもありました。

(伊藤いづみ：ITO Izumi 国際課国際企画担当)

留学フェアと学校訪問

～タイ バンコク (9月16日・17日)～

日本留学フェアが9月16日にバンコクのセントラルワールドの会議場で開催され、国際交流センターの市嶋助教、宮崎国際課職員と高島が参加しました。秋田大ブースへは通訳としてお願いした元本学留学生のジンタラットさんのタイ語での呼びかけで100名近くの訪問者がありました。相談内容は、学部受験と奨学金が多数を占めましたが、大学院希望者が研究内容について問い合わせるケースもかなりありました。フェアは盛況でしたが、秋田大への理解促進にはメールでの追加情報発信など、一歩進めた活動が望まれます。



ジンタラットさん (中央) と

左記のとおり、バンコク日本留学フェアに参加してきました。秋田大学で教員研修留学生として日本語を学んだジンタラットさんも、遠方からかけつけてくれサポートして下さいました。ジンタラットさんは、自身が秋田大学で学んだ経験をもとに、ブース訪問者に対して、秋田や秋田大学の良さを熱く語ってくれました。他大学のブースでも、多くの卒業生が活躍していました。今回のフェア参加をとおし、留学生の卒業生ネットワークの重要性を実感しました。また、タイの場合、高校卒業後、ストレートで日本の大学に進学するケースは稀で、多くの人が、一度、日本語学校で学んでから進学しています。秋田大学の長期の留学生数を増加させるためには、国内外の日本語学校へのPR が重要になるとの印象を持ちました。

翌17日には、「まいにち日本語学校」と「カセサート大学附属高校」を訪問し、密度の高い情報交換を行いました。

(高島勲：TAKASHIMA Isao 国際交流コーディネーター)

(市嶋典子：ICHISHIMA Noriko 国際交流センター)

■大学間協定等締結情報

大学間協定 (合計20ヶ国・地域：40大学等) 部局間協定 (合計7ヶ国・地域：14学部等)

■秋田大学の留学生数

合計211名 学部生：106名 大学院生：43名 交換留学生・研究生等：62名

(2012年10月1日現在)